

「不完全な文明化」の先に

—メアリ・ウルストンクラフトのフランス革命論—

平倉 菜摘子

はじめに

『フランス革命の起源及び発展に関する歴史的・道徳的考察』(*An Historical and Moral View of the Origin and Progress of the French Revolution*, 1794, 以下『フランス革命論』)は、メアリ・ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft)が著した唯一の歴史書である。革命政府への意義表明が極めて危険であった時期に、滞仏中のウルストンクラフトが「偉大な本」(*Letters* 2003, 226)にするつもりで書き始めた『フランス革命論』は、後世には全著作のうち「最も独創性に欠ける作品」(Wardle 41)との評価が下されるに至る。その主な理由は、本書が出典の多くを当時の定期刊行物に依拠しており、言わば寄せ集めのな性質を持っているためであると考えられよう(*Letters* 2003, 247 n. 580)。出典の内容をとときには大胆に膨らませ、半ばフィクションを綴るような彼女の手法も、洗練された歴史家のものとは言い難い(Taylor 164)。しかしウルストンクラフトを含む理性的非国教徒(Rational Dissenters)に寛容な『マンスリー・レビュー』が指摘するように、年代記編者(annalist)ではなく思想家(philosopher)としての立場から書かれた本書は、『女性の権利の擁護』(*A Vindication of the Rights of Woman*, 1792)の出版後まもなく渡仏したウルストンクラフトが革命という現象をいかに捉え、自らの思想を深めたかについて重要な示唆を与えてくれる(Rendall 161)。

『女性の権利の擁護』の独創性を高く評価する研究者が『フランス革命論』に失望を覚えるもう一つの理由として、前者において高らかに論じられた原始フェミニズム思想が後者ではほとんど言及されていない点が挙げられよう。しかし『フランス革命論』の主眼は母国イギリスの読者に向けてフランスの現状を報告しつつ、英仏社会の比較、ひいてはヨーロッパ社会の発展に関する考察を行うことにあり、ジェンダー的な要素を最小限に留めたのはウルストンクラフトの戦略的意図であると考え

られる。同時代のヘレン・マライア・ウィリアムズ (Helen Maria Williams) が著した『フランスからの手紙』 (*Letters Written in France*, 1790-96) 同様、ウルストンクラフトの『フランス革命論』もルポルターージュとしての性格を備えているが、ウィリアムズが明白に女性という視点に立って革命を解釈しているのに対し、ウルストンクラフトは女性の属性を示さない言語、当時の考え方で言えば「男性的理性言語」を用いてフランス革命の歴史的・道徳的考察を試みている (大石 168)。

『女性の権利の擁護』及びそれに先立つ『人間の権利の擁護』 (*A Vindication of the Rights of Men*, 1790) においてウルストンクラフトはヨーロッパ社会の発展に関する考察を既に行っていたが、革命の進行と並行して執筆された『フランス革命論』ではその考察に深みが増している。本論では『フランス革命論』に頻出する「文明化 (civilization)」という概念に焦点を合わせ、年代記編者ではなく思想家としての立場から書かれた本書が同時代の歴史書には見られない思想的先駆性を胚胎していることを指摘したい。

1 ウルストンクラフトのフランス滞在

まず『フランス革命論』成立の背景を確認しておこう。1792年12月、約6週間の予定でパリに渡ったウルストンクラフトは、アメリカ人男性ギルバート・イムレイ (Gilbert Imlay) との出会いにより、2年半を革命下のフランスで暮らすことになる。敵国人として投獄される恐れがあったパリを離れ、近郊ヌイイにコテージを借りた彼女は、『フランス革命論』の執筆を始め、ほぼ同時にイムレイの子を妊娠する。以後、本と子が彼女の中で同時に成長していく。やがてイムレイがウルストンクラフトを便宜上「合衆国市民の妻」としてアメリカ大使館に届け出たため、二人はパリで暮らせるようになる (Todd 2000, 239)。しかし彼が頻繁にパリを離れるようになると、ウルストンクラフトは1794年2月、彼を追って港町ル・アーヴルに引っ越す。その後数ヶ月で『フランス革命論』を仕上げ、ほぼ同時に出産する。フランス語の出生証明書によれば、この女兒フランソワーズ (Françoise) は「市民ギルバール・イムレイ、アメリカ人商人」と「市民マリー・ウルストンクラフト、彼の配偶

者」との「正式な婚姻」により誕生したことになっている（Verhoeven 185）。しかし母国イギリスの法律ではウルストンクラフトは未婚のままであり、したがってフランソワーズは非嫡出子であった。後にウィリアム・ゴドウィン（William Godwin）と正式に結婚した際にこの事実が明るみに出たため、ウルストンクラフトは親しい友人からも非難を浴びることになる（Todd 2007, 28-29）。いかなる法的身分であれ、革命下のル・アーヴルで1冊の本と一人の子を生み出した彼女は、去り行くイムレイを追って半年後にパリへ、そして1795年4月にはロンドンへ渡る。2年半に及ぶ彼女のフランス滞在はここで幕を閉じる。

上記から明らかな通り、ウルストンクラフトの『フランス革命論』は恐怖政治の最中に着手され、テルミドールのクーデタのわずか数ヶ月前に書き上げられた作品である。革命の進行に鑑みれば、1794年の諸事件まで記録されていてもおかしくないが、ウルストンクラフトは1789年10月の事件で記述を終えている。これには二つの理由が考えられよう。一つには、数巻仕立てで「偉大な本」を完成させるつもりで書き始めたものの、妊娠・出産と度重なる引っ越しに追われ、思うようにペンを進められなかったこと、もう一つには、革命への希望や理想を貫きたい気持ちが強く、革命の変質や恐怖政治の時代を綴るには抵抗があったということである。いずれにせよ、革命初期で記述が終わっているため、この「偉大な本」は未完の大著という印象を読者に与える。以下、「文明化」をキーワードにウルストンクラフトのフランス革命観を検証したい。

2 革命下フランスのルポルタージュ

まずフランスという国と革命を初めて間近に観察したウルストンクラフトの反応を確認しよう。『フランス革命論』に先立ち、彼女は「フランス国民の現状に関する書簡」（“Letter on the Present Character of the French Nation,” 1793）という短い論考を著している。これはフランス国民議会による対英宣戦布告から2週間後に執筆され、ロンドンの出版者ジョセフ・ジョンソン（Joseph Johnson）に送られたもので、書簡形式によるルポルタージュの序文として書き始められたものの、結局序文の

みで終わってしまった論考である。革命が辿った軌跡を分析する上でウルストンクラフトが最も重要と捉えた要因に関する興味深い洞察が織り込まれている。

ある国や国民の特徴を把握するためには、その国の個人と親しくなる前の第一印象が重要である。そう信じるウルストンクラフトがパリに着いて最初に感じたフランスの特徴は「富裕と窮乏、エレガンスとだらしなさ、都会風の洗練と偽りの極端な対比」(6: 443)だった。そのような特徴を持つマナー(習慣・風俗)に彩られたフランスは「身体的には最も洗練されているが、おそらく世界で最も浅薄な(superficial)国」であり、フランス人は「世界で最も快樂を好む国民」という印象を他国の人々に与える(6: 444)。しかしウルストンクラフトは続けて、そうした性格を生み出す源泉は社会条件にあるのではないかと指摘している。虚栄心や浅薄性はフランス人に限ったものではなく、歴史上、文明化のある時点で見られる人間性の一つではないかと考えているのである。

スコットランド啓蒙思想に精通していた彼女は、人間社会が原始的(primitive)、田園的(pastoral)、農耕的(agricultural)、商業的(commercial)の四段階を経て洗練された社会に到達するという考え方に照らし合わせ、フランスは現在、文明化プロセスのどの段階に位置しているのかという問いを發することが革命を理解するための重要な鍵であると主張する。つまり彼女はフランス革命を文明化、人類の進展の歴史として捉えているのであり、この主張はエドモンド・バーク(Edmund Burke)が同じ革命を人類の墮落の歴史、原始時代への逆行と捉えたのと対照的である(O'Neill 2007)。ただし、パリの恐怖政治を間近に観察したことで、ウルストンクラフトは『人間の権利の擁護』や『女性の権利の擁護』で展開した理想主義、ある種の樂觀主義を多少修正している。

Before I came to France, I cherished, you know, an opinion, that strong virtues might exist with the polished manners produced by the progress of civilization . . . But now, the perspective of the golden age, fading before the attentive eye

of observation, almost eludes my sight. (6: 444)

革命による完全な社会の実現という自説が力を失いつつある様を嘆きながらも、ウルストンクラフトはこの時代の多くの急進主義者とは異なり、恐怖政治の出現を機に革命自体が間違っていたと転向する世間の風潮にはなびかなかつた。彼女は革命の暴力を黙認したわけではなく、パリで「自由の大義を汚した血」(6: 444)に思いを馳せて嘆き悲しんでいるが、「ヨーロッパに夜明けが近づいている」という希望を捨てず、「現在の邪悪を超えて将来を見通す」(6: 445)姿勢を貫いている。

革命への希望を持ち続けた点に加え、この短い論考においてももう一つ明らかになるウルストンクラフトの特徴は、スコットランド啓蒙思想においては賞賛される商業社会を批判している点である。フランスの現状を間近に観察するにつれ、洗練された(または洗練され過ぎた)マナーは道徳的美徳と相容れないものではないのか、旧体制は打倒されたが新たな不公平が現れ、公私の美徳の進展を妨げているのではないかという疑念が生まれ、「野蛮」から「商業」へと発展を続けた社会が「洗練されたマナー」の犠牲になることなく最終的な道徳・美徳に到達するためにはどうすればよいのかについて思索を巡らせている。

ウルストンクラフトはこの短い論考を次の言葉で閉じている。「(革命に関する著作において)この先もマナーより道徳を重視するつもりです」(6: 446)。その成果がスイイで着手され、ル・アーヴルで書き上げられた『フランス革命論』である。「フランス国民の現状に関する書簡」に明らかなウルストンクラフトの二つの特徴、すなわち恐怖政治に至っても革命への希望を持ち続けた点と商業社会を批判した点が『フランス革命論』においてさらに詳細に論じられることになる。

3 「不完全な文明化」の先に

では『フランス革命論』におけるウルストンクラフトの主張を見てみよう。第1節で確認した通り、本書における歴史的記述は1789年の出来事に留まっている。すなわち5月の全国三部会開会、6月の国民議会会成立、7月のバステューユ陥落、8月の封建制廃止と「人権宣言」可決、

及び10月のヴェルサイユ行進までである。ウルストンクラフトはこれらの歴史的な事件を哲学的に解釈し、マナーと道徳的進歩の関連性についての歴史的論文という広い枠組みの中でフランス革命を分析している。彼女は革命史自体に焦点を合わせるのではなく、道徳哲学の思想家として、ヨーロッパの長い歴史の中で「マナーと道徳」がいかに発展してきたかについての考察を、フランス革命を例にとりて展開しているのである。

スコットランド啓蒙思想家同様、ウルストンクラフトも道徳やマナーと社会における経済的生活との機能的関連性を理解している。彼女が彼らと決定的に異なる点は、社会や政治の機能を評価する方法として個人の道徳観を上位に置くという強い主張である (O'Brien 184)。『女性の権利の擁護』において彼女は「公的な美徳は私的な美徳の集合体である」という認識を繰り返し述べていた。

To render women truly useful members of society, I argue that they should be led, by having their undertakings cultivated on a large scale, to acquire a rational affection for their country, founded on knowledge . . . And to render this general knowledge of due importance, I have endeavoured to shew that private duties are never properly fulfilled unless the understanding enlarges the heart; and that public virtue is only an aggregate of private. (5: 264)

上記から明らかな通り、ウルストンクラフトは個人の道徳的美徳を社会の基盤に据えている。彼女はトマス・ペイン (Thomas Paine) のような徹底的な革命主義者—組織を変えることによって社会を変えることを望む者—には成り得なかった。彼女は個人の態度における変化から生じるべき、基本的な心理学的・個人的改革を追求したのである (Todd 2000, 186)。

スコットランド啓蒙思想の進歩史観では最終段階、すなわち最も洗練された段階に置かれている商業社会を、ウルストンクラフトは「不完全な文明化 (partial civilization)」(6: 111) の状態と捉えている。洗練されたのはマナーのみで、道徳的美徳がその犠牲になっていると考えたので

ある。この主張は『人間の権利の擁護』及び『女性の権利の擁護』にも見られたが (5: 10; 5: 73)、『フランス革命論』ではその意識がさらに強まっている。

Dissimulation imperceptibly slides into falshood [sic], and Mazarin, dissimulation personified, paved the way for the imposing pomp and false grandeur of the reign of the haughty and inflated Louis 14th; which, by introducing a taste for majestic frivolity, accelerated the perfection of that species of civilization, which consists in the refining of the senses at the expence of the heart; the source of all real dignity, honour, virtue, and every noble quality of the mind. (6: 24)

心を犠牲にして感覚を洗練させることによって「文明化」された社会、すなわち虚栄と腐敗に満ちた社会がフランス旧体制であり、革命はそれを打倒することにより真の文明化を求めたのだとウルストンクラフトは主張している。その真の文明化のモデルとして彼女が思い描いたのは、マナーと道徳が一つに収斂し、政治的正義が実現した時に出現する、商業的洗練を超えた段階である。つまりこの『フランス革命論』の目的は、フランス社会がなぜ革命を通じて最終的な高次段階に移行することができなかったかを発見することにあると言えよう。

ウルストンクラフトは国民議会による新憲法を軽蔑し、真の共和国は「文明が現状よりはるかに完成した段階に達して初めて」(6: 166) 機能すると考える。国民議会はあまりにも多くの野心的かつ不毛な政治家によって成り立っており、「深く思索する人」(6: 143) が欠けていることを彼女は見抜いていたのである。「深く思索する人」とは、人々の偏見や政治的安定を考慮に入れ、時間をかけて改革を進めることが最善の方法だと理解できる人を指す。自身「深く思索する人」を志していた彼女は、現在「不完全」な状態にある文明化を完成に近づけるためには、あまりにも急激な社会改革は危険であると判断し、正しい時期を見極めること、すなわち「待つ力」の重要性を説く。

And if they [deep thinkers] find, that the current opinion, in overturning inveterate prejudices, and the decayed walls of laws, that no longer suit the manners, threatens the destruction of principles the most sacred; they ought firmly to wait at their post, until, the fervour abating, they could, by diverting the stream, gradually restrain it within proper bounds. – But such patriotism is of a slow growth; requiring both a luxuriant public soil, and to be fostered by virtuous emulation. (6: 143)

そしてこの思想は次作『北欧からの手紙』(*Letters Written during a Short Residence in Sweden, Norway and Denmark*, 1796)においてさらに深められることになる。

An ardent affection for the human race makes enthusiastic characters eager to produce alteration in laws and governments prematurely. To render them useful and permanent, they must be the growth of each particular soil, and the gradual fruit of the ripening understanding of the nation, matured by time, not forced by an unnatural fermentation. (6: 346)

恐怖政治の台頭を機に、フランス革命は始めから失敗だったと主張し始めるイギリスの保守主義者に対し、ウルストンクラフトは革命の原理は間違っではおらず、これは起こるべくして起こった革命であり、問題はそれを引き起こしたフランス旧体制における極度の不平等・不正にあると指摘した。革命暴力から生じる問題に対する唯一の解決策は、パークが考えるような革命前の社会、すなわち階級主義に由来する墮落した道徳への逆行ではなく、より進んだ民主主義であり、それこそが真の文明化に達するための唯一の道だと考えたのである。個々の人間の尊厳、価値、権利を尊重するという理想に燃えて始まった革命がその途上で恐怖政治という局面を迎えても、それを最終的な民主主義に至るための一種の必要悪として解釈したと言えよう。フランス革命を自由の創設と自由の破壊という二つの部分に分ける考え方は復古王政期の自由主義歴史家に顕著だが（フュレ、オズーフ 162-63）、ウルストンクラフトは恐怖

政治下のフランスにおいてそのような視点の萌芽を既に提供していたのである。

おわりに

恐怖政治に至っても革命の原理—人権思想と平等思想を基盤とする社会改革—への希望を持ち続けたウルストンクラフトは、フランス滞在を終え、ロンドンで一度目の自殺未遂を図った後、イムレイの求めに応じて北欧に赴く。旅先での思索を綴った『北欧からの手紙』に「フランスに行く前に北欧を旅していれば、フランスの虚栄と腐敗についての評価において、私はあれほど辛辣にはならなかったでしょう」(6: 326)と告白する彼女は、未だ「野蛮」状態にある北欧がイギリスやフランスのような「洗練された」社会になる必要性を痛感しつつも、その途上で通過せざるを得ない商業社会への嫌悪感を強め、文明化の完成によって洗練されたマナーと道徳的美徳が共存する社会を思い描いている。

人間や社会は進歩し続けなければならないという信念を一生貫いたウルストンクラフトは、恐怖政治下で書いた『フランス革命論』にもその姿勢を強く打ち出し、母国イギリスの革命論争に最も重要な議論の一つをもたらした(Furniss 68-69)。扱う歴史的範囲が限られているため、革命の諸事件を系統的・客観的に知りたいと願う読者にとって本書は物足りない面もあると思われるが、ウルストンクラフトという思想家の成長を追う上では重要な作品である。「マナー」や「道徳」「不完全な文明化」等の語彙は堅苦しく、ときにはくどいとも思われよう。しかし理性的で自立した人間のためにウルストンクラフトは道徳とマナーの再編を目指したのであり、人間社会は商業段階に留まることなく文明化の完成を目指すべきであるという独創的な思想が織り込まれた『フランス革命論』の意義は再評価に値すると考えられる。

※本稿は第39回イギリス・ロマン派学会全国大会(2013年10月20日、安田女子大学)における発表論文を加筆修正したものである。

引用文献

- Furniss, Tom. "Mary Wollstonecraft's French Revolution." *Cambridge Companion to Mary Wollstonecraft*. Edited by Claudia L. Johnson, Cambridge UP, 2002, pp. 59-81.
- O'Brien, Karen. *Women and Enlightenment in Eighteenth-Century Britain*. Cambridge UP, 2009.
- O'Neill, Daniel I. *The Burke-Wollstonecraft Debate: Savagery, Civilization, and Democracy*. Pennsylvania State UP, 2007.
- Rendall, Jane. " 'The Grand Causes Which Combine to Carry Mankind Forward': Wollstonecraft, History and Revolution." *Women's Writing*, vol. 4, no. 2, 1997, pp. 155-72.
- Taylor, Barbara. *Mary Wollstonecraft and the Feminist Imagination*. Cambridge UP, 2003.
- Todd, Janet. *Mary Wollstonecraft: A Revolutionary Life*. Weidenfeld & Nicolson, 2000.
- . *Death and the Maidens: Fanny Wollstonecraft and the Shelley Circle*. Profile Books, 2007. ジャネット・トッド著、平倉菜摘子訳『死と乙女たち—ファニー・ウルストンクラフトとシェリー・サークル』音羽書房鶴見書店、2016年。
- Verhoeven, Wil. *Gilbert Imlay: Citizen of the World*. Pickering & Chatto, 2008.
- Williams, Helen Maria. *Letters Written in France*. Edited by Neil Fraistat and Susan S. Lanser, Broadview P, 2001.
- Wollstonecraft, Mary. *The Collected Letters of Mary Wollstonecraft*. Edited by Janet Todd, Allen Lane, 2003.
- . *The Collected Letters of Mary Wollstonecraft*. Edited by Ralph Wardle, Cornell UP, 1979.
- . *The Works of Mary Wollstonecraft*. Edited by Janet Todd and Marilyn Butler, Pickering & Chatto, 1989. 7 vols.
- 大石和欣「境界線上のルポルターージュあるイギリス人女性とフランス革命」見市雅俊編『近代イギリスを読む—文学の語りと歴史の語り』法政大学出版局、2011年、151-91頁。

「不完全な文明化」の先に

フランソワ・フユレ、モナ・オズーフ編／河野健二、阪上孝、富永茂樹
監訳『フランス革命事典 7—歴史家』みすず書房、2000年。